

2021 年 1 月 7 日

2021 年始めにあたり、言霊について整理します。 1

島田正路氏著書を参照

その 240

世界中の人類の頭の中に同じ創造知性という、音韻（バイブレーション）が働いています。

その同じものであるが故に、同じ色、同じ音、同じ感触等（五官）が共通に認識できます。

その創造知性が日本語の父韻と呼ばれる音韻（バイブレーション）です。

母音は宇宙にあるエネルギー五つ（アイウエオ）を指します。暗闇の中にありそのエネルギー自体はただ存在するだけで自らは動きません。氣の元のキです。

人間の心はこの五つのエネルギーにいますから五重^{いゑ}、つまり家の語源になっています。

始め宇宙と一体である自分の意識が（天の御中主の神）、生まれ出ることにより（言霊ウ）、その分身が現われます。心と身体を伴って現われます。

その身体には五官器があり見る、聞く、触れる、味わう、臭う、が付いており、自分と他のものと区別する機能が付いています。ここから一つの宇宙だったものが、^{わか}割れます。

元の自分は母音（アイウエオ）そのもの、五官によって感じる区別されたものが半母音（ワヰウヱヲ）となります。

何かを見たとき、自分の思いが動物なのか、人間なのかということを意識すると（見る側・主体側）、ああ猿だった（見られた側・客体側）と判りますが、何色、大きさは、いくつといった意識していなかった情報は、正確に分かりません。

この見ることを意識するが（言霊ウ）の作用で、人間かどうかを答えたのは、見られたものから（言霊ワ）の情報です。

こういう人間の心の構造を解き明かしたのが古代「霊知り」言われる集団です。

その内容が言霊布斗麻邇 アイウエオ五十音表とその運用法なのです。

その 241 につづく

島田正路氏著書を参照

2021 年始めにあたり、言霊について整理しましょう 2

その 241

現象化を起こすとは自分（言霊ウ）と相手（言霊ワ）で意識の伝達があって起こります。

その前に、意識とはなにかについて説明が必要ですね。意識は言霊（言葉）によって、名をつけられたものを連想することで、働く心の事です。

現象化とは

その 1

夫婦の例で、夫（主体）が、お茶が呑みたいと言った。奥さん（客体が）ああ家の旦那はお茶が呑みたいと言ったのだなと了解されて、奥さんがお茶を出すことが起こる（現象化）

その 2

相手が人間でない例

大きな石が邪魔になってそれを移動したいと思う（主体）、客体の情報石の大きさはとても一人では動かせない、二人でも持ち手が取れなく無理、場所も足場が悪く・・・等々、客体側（言霊ワ）からの情

報を得て、クレーン車等、準備をして（了解があって・これならやれると判断して）現象化が起こる。

この自分から相手（人でも物でも）に意識を働かせて、現象化の運びになります。

その現象を起こす心の働き方は四つしか有りません。

人間の意識の働かせ方（自分・主体から相手・客体へ）は四つしかないのです。

言霊ウ中心 天津金木音図 欲望

言霊オ中心 赤玉音図 知識・学問

言霊ア中心 宝音図 感情・芸術・宗教

言霊エ中心 天津太祝詞音図 政治・道徳

これで全てです。この住んでいる世界をこの世（この^よ四）と呼ぶ語源になっています。

現象化を起こすには意識を働かす、つまりものの名（言霊・言葉）を思い浮かべて、連想します。人間

相手では言を発します。自分から相手へ伝える工程は必ず八工程必要です。

それが言霊父韻の八つを指します。

この八つの父韻と五つの母音から子音 32 が生まれ、半母音・文字化ンを含め五十音言霊図が出来上

がります。心の要素はこの五十で全てなのです。物質の元素記号のようなものです。

その五十音と運用方法五十で百になります。百の道つまり・百（も）の道（ち）です。これが正月の鏡

餅の語源です。五十の言霊と五十の運用法二つで百となり、鏡餅を二段に備えて祀るのは、それを思い出させるための御先祖様からの伝承なのです。

その 242 につづく

島田正路氏著書を参照

2021 年始めにあたり、言霊について整理しましょう 3

その 242

八つの父韻は母音アイウエオの宇宙のエネルギー・キを動かしキの流れを起こします。（実相と呼びます。）

この事を一般的に氣と呼んでいます。

この八つを神社の鳥居は表徴しています。

左右の柱は自分（主体）と相手（客体）を示します。八つの父韻が自分と相手を間を飛んで（鳥のように）意識を伝え現象化が起こります。鳥居の語源となりました。

八父韻が自分と相手の間に存在することを表わします。

以上の事柄は人間が意識しないでも働いています。それを先天（あな）と呼びます。

頭脳内で意識が起こってくる次の作用が真名（まな）と呼ばれ、言葉に組んで、言葉として発して神名

(かな) となり、それが相手の耳に入り真名 (まな) に変換され了解されて、先天 (あな) に記憶されます。この一循環が心の世界の全てです。

こころの構造図とは

言霊ウ 欲望に住む人の心構造

言霊ウ (天津金木音図) 須佐男の命と呼ばれる原識欲望の世界に住む人の心の構造
経済・産業に住む人 生存競争 弱肉強食の世界

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

言霊オ (赤玉音図) 須佐男の命 月読の命と呼ばれる経験知 学問・科学に住む人の心の構造図

生存競争 弱肉強食の世界

ワ	ラ	ヤ	ナ	サ	ハ	マ	タ	カ	ア
ヰ	リ	イ	ニ	シ	ヒ	ミ	チ	キ	イ
ヲ	ロ	ヨ	ノ	ソ	ホ	モ	ト	コ	オ
ウ	ル	ユ	ヌ	ス	フ	ム	ツ	ク	ウ
エ	レ	エ	ネ	セ	ヘ	メ	テ	ケ	エ

言霊ア (宝音図) 月読の命 と呼ばれる芸術・終日境の世界にすむ人の心の構造図
光に満ちた空を感得した人世界 薄明かりで天照大神の心を伝える

キ	ミ	イ	ニ	シ	ヒ	リ	キ	チ	イ
エ	メ	エ	ネ	セ	ハ	レ	ケ	テ	エ
ワ	マ	ヤ	ナ	サ	ハ	ラ	カ	タ	ア
ヲ	モ	ヨ	ノ	ソ	ホ	ロ	コ	ト	オ
ウ	ム	ユ	ヌ	ス	フ	ル	ク	ツ	ウ

言霊エの次元（天津太祝詞音図） 天照大神と呼ばれる 実践智の働く世界
菩薩の世界 の心の構造図 人類は一つ 宇宙の経緯を刻む心

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
キ	シ	イ	ニ	リ	ヒ	ミ	キ	チ	イ
エ	セ	エ	ネ	レ	ヘ	メ	ケ	テ	エ
ヲ	ソ	ヨ	ノ	ロ	ホ	モ	コ	ト	オ
ウ	ス	ユ	ヌ	ル	フ	ム	ク	ツ	ウ

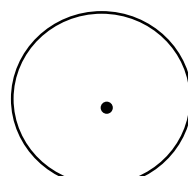
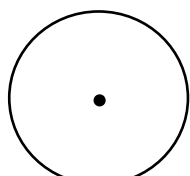
次に父韻について

創造神といわれる父韻 チイキミシリヒニ 火花と表現されます。イからキまでの横の列の並びが父韻の並びと呼ばれるものです。

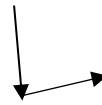
八父韻は二つずつ組み合わせさせて陰陽または正反をなし、それが四組あります。チイ・キミ・シリ・ヒニであります。

実相を表わします。人間の意志と言われる八つのハタラキです。

チは外の○ イはうちの点の表示 キは中心に向かう矢印 ミは中心から外に向



かう矢印



シは中心に集まる矢印 リは外に拡がる矢印 ヒは外の点線 ニは内の点線

- チ 精神宇宙全体がそのまま現象発現に向かって動き出す端緒の力動員
- イ 動き出した力動が持続する韻
- ミ 精神宇宙の中に己にある自己の体験内容に思いが結び付こうとする力動員
- キ 反対に体験内容を自我の方向に掻き寄せようとする力動員
- シ 精神宇宙にある精神の内容が螺旋形の中心に静まり収まる力動員
- リ シとは反対に、ある精神内容が宇宙の広がりに向かって螺旋状に発展拡大していく力動員
- ヒ 精神内容表現が精神宇宙球の表面に完成する韻
- ニ その反対に物事の現象の種が精神宇宙の中核に煮詰まり成る韻

以上十七音の母音・半母音・父韻・親音です。これを天名（あな）

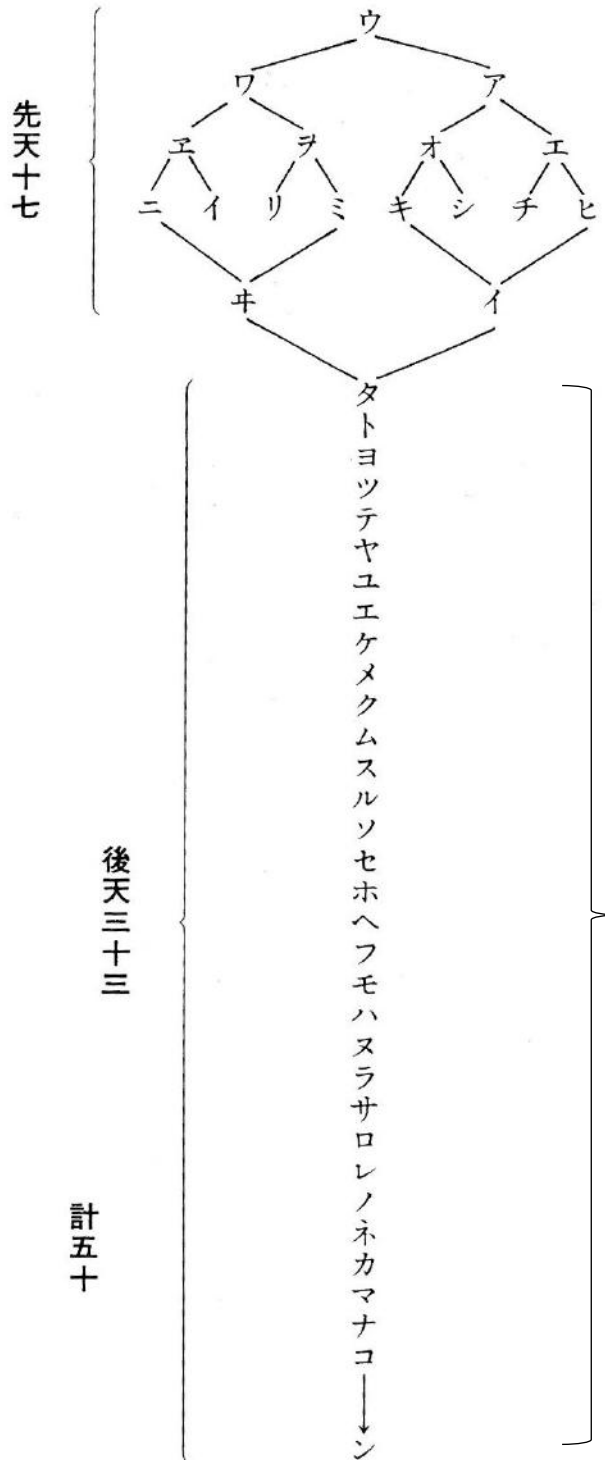
子音 は父韻と母音とが噛み合って（子音・霊駈り・光）となります

人間の頭脳の中で働きます。

言葉としては組まれないマナ（未^ま鳴）の期間 先天が言語に渡っていくまでの期間

十七音の母音・半母音・父韻・親音です。

図 19



天名 (あな)

真名 (まな)

神
か 名

真名 (まな)

文字
記録

母音・半母音・父韻・

子音三三音

後天三十三

計五十

「古事記と言霊」 島田正路氏著書より抜粋

その 243

2021 年始めにあたり、言霊について整理しましょう 4

言霊子音 1

言葉としては組まれないマナ（未^ま鳴^な）の期間 先天が言語に渡っていくまでの期間

津島またの名は天の狭手依比売^{さでよりひめ}

タ ^{おおごとおしお} 大事忍男 の神 先天宇宙が力動として現れる

ト ^{いわつちひこ} 石土毘子の神 石は五十葉で五十音言霊のこと 土は培うの意味 毘古は主体 石土

毘古は五十音言霊を育てるチイキシリヒコの八父韻のこと

ヨ ^{いわすひめ} 石巢比売の神 五十音言霊を秘める住家 ウオアエの四母音

ツ ^{おおとひわけ} 大戸日別の神 大いなる十の創造知性 言霊トが言霊ヨに近づく

テ ^{あまふきお} 天の吹男の神 父韻が四母音に吹きかける

ヤ ^{おおやひこ} 大屋毘古の神 大きな構造物・父韻が母音とむすび付いて心の中にイメージの形を作る

ユ ^{かぜもつわけ} 風木津別の忍男 の神 主観と客観に分かれ一つの考えになっていく

エ ^{わたつみみ} 大綿津見の神 イメージが細い所を通して次第にまとまる

ケ ^{はやあきつひこ}速秋津日子の神 細い河を流れて次第に先天の力動から一つのイメージに考えがまとまる

メ ^{はやあきつひめ}妹速秋津比売の神 いよいよ海である口腔に行き着きました

意識されない 先天の力動 が 現実にタトヨツ・・・と 10 個の^{まな}未鳴の現象をへて 細い通路を通過して 1 つイメージにまとまっていきます。ここまでが川に喩えられます。そして速秋津日子 妹速秋津比売 の言霊ケ・メに来て ひとつの考えにまとまります。次にまとまった考えが 言葉と結ばれ発声されていく段階・過程が海です。頭脳内の細い通路（川）を通過して いよいよ広い海（人間の口の中に）れ出ようとしています。速秋津日子 妹速秋津比売 言霊ケ・メ までが 川に喩えられ これから生まれてくる沫那芸の神以下が海というわけです。

子音はそれぞれの音（バイブレーション）が言霊さらに言葉を組んで発声して、記憶に残るまでのそれぞれのハタラキを司っています。

たとえば「タ」とは五十音言霊音図全てのこと、つまり心の作用が生まれてくる言霊全てを指し、全霊なのです。これで音（身）を発すると全身全霊なのです。今はやりで言う全集中なのです。

「ト」とは自分（ア）と相手（ワ）を含め八つの父韻の言霊を、全部合わせて十（ト）になります。現象を起こす手順の十個言霊のことを指します。

「ヨ」とは実際にこの世（ヨ）で現象が現われる心の次元は四つあります。ウオアエの四（ヨ）つです。この事を指します。

「ツ」とは津つまり港のようなモノを渡すハタラキのある言霊です。八つの父韻の並びを四つの次元に受け渡

しをするハタラキのことを指します。

「テ」とは手の語源で「ト」で選ばれたモノを「ヨ」に「ツ」で受け渡しをして結びます。

そのハタラキをします。

「ヤ」八つの父韻と四つの母音が結び付いて言葉をつくり、それによって様々なイメージ（意識）をつくり出すハタラキをします。この時点で始めて言霊が（霊駈り・光）が出来ます。しかしまだ言葉までは完成していません。

「ユ」自分（主体）と相手（客体）が意識の中で区別され、考えるというハタラキを生みます。面白いですね。英語の you（相手）と「ユ」さらにユダヤ民族のユ（物質科学文明を発達させ使命を日本のスメラミコトから仰せつかった民族）と「ユ」はここから来ているよう思います。

「エ」は入り江で津は大きくてまだ混沌としているが、それが入り江で細いところを通されてまとまってくるハタラキをします。

「ケ」「メ」は考えが言葉に組まれる直前のイメージとして集まるハタラキです。「ケ」は気であり・霊であり、主体です。「メ」は芽であり、眼であり、客体です。「ケ」は霊を「メ」は体を受け持っています。

その 244 につづく

2021 年始めにあたり、言霊について整理しましょう 5

その 244

言霊子音 2

佐渡の島 クムスルソセホへ 8 個の言霊の事を指す。

言霊ク・ム

沫那芸^{あわなぎ}の神・沫那美^{あわなみ}の神の二神の活動は、伊耶那岐・伊耶那美の二神の目に見えない活動を受けて、後天である現実において吾と汝、霊・体、心と言葉を結びつける。沫那芸の沫はア（吾）とワ（汝）であり、アイウエオとワヰウヱヲであります。沫那芸は氣であり霊であります。沫那美の美は身であり、体であり音（言）です。吾と汝を、心と身を、そして霊と音を組み結ぶ働き。まとまった心のイメージを言葉に結び組んで行く活動

言霊ス・ル

類那芸^{つらなぎ}の神・類那美^{つらなみ}の神 実際に発音される。そのため類（ほお）の字が使われる。

類那芸は霊を類那美は体を受け持つ。言霊スは澄む・巢・住む・で動作のない状態。それに対して言霊ルは流・埧埧等で動く状態を示します。両方の働きが調和すれば「動と静」物事はスルスルと運びます。天地の初発は 言霊ス（巢・澄）であることが確認できます。一切の物が生まれ出るエネルギーで満しているが、静かに澄んで動かない状態です。

言霊ソ・セ

天の水分の神・国の水分の神

心を言葉と組んで発音するためには水の補給が必要となります。天の水分^{みまくり}の天は霊、国の水分とは体の事を指す。天の水分とは発音する時に必要とする霊的・心的なエネルギーの補給、国の水分とは体的エネルギーの補給の事です。人に伝えようと発音・発声するためには、それなりの心的・体的エネルギーを必要とする。

言霊ソは注ぐ・添える等 言霊セは瀬・急く・堰・責める等

言霊ホ・ハ

天の久比奢母智^{くひざもち}の神・国の久比奢母智^{くひざもち}の神

久比奢母智とは久しく（久）その内容（比・霊）が豊に（奢）持ち（母智）続く、という意味であります。言葉は心と音の双方が結ばれて出てきます。発音された言葉は、その言葉の内容を何処までも維持し発展する。言霊ホは穂・火・など、言霊ハは山の辺・舳・凹等に見られ、双方共に先に行って開く姿であります。

言霊クムスルソセホへの八個の区分を佐渡の島といいます。先の津島という区分で先天の活動が実際に一つの考えてとしてまとめ、次にそのまとまった考えが言葉に組み結ばれる工程が佐渡の島であります。

此によって心が肉体の発声器官によって実際に発音されることとなります。霊と体の双方の働きを実際の言葉として、実相として実現・創造する働きの区分、という意味です。アイデアとしての真名が音声としての神名となって空中に飛び出していくこととなります。

その 245 につづく

2021 年始めにあたり、言霊について整理しましょう 6

その 245

言霊子音 3

おやまとよあきつしま
大倭豊秋津島

しなつひごの神よりおおげつひめ
志那都比古の神より大宜都比売の神の神まで十四神は佐渡の島に属する子音言霊の働きで心と言葉が組み合わされ、発声器官によって発生された言葉が、空中を飛び、人の耳にきかれ、復唱・検討されて「ああ、この事か」と了解され、言葉の役目が完成され、再び先天宇宙に帰って行きます。この過程が十四の段階が有り、十四個の言霊で表されるということです。初めの四言霊は発声された言葉が空中を飛んでいる間の姿・内容を表しています。

言霊フ

風の名は志那都比古の神

発音されて 空中に飛び出した言葉は もうそれで発生した人と 関係がなくなるわけではありません。志

那都とは ^{こころざし}志 の内容である言霊（真名）が ことごとく（那） 言葉（都・霊屋子）として活動して

います。風（ふうのフ）の神の風とは息ことでありましょう。言霊フはその心です。吹く・伏す・踏む・・・

などに見られます。

言霊モ

木の神の名は久久能智の神

久しく久しく能く智を保っている、という意味。木の神の木は氣であり霊を表します。言霊モは茂・盛る・森

等に見られるように、茂り発展する形。発声されて空中を飛んでいる言葉は人間の気持ちを何時までもよ

く保持し伝えます。

言霊ハ

山の神名は大山津見の神

山は八つの間であります。父韻チイキシリヒニが  発完する図です。八つの間に父韻がそれぞれ入

ります。その中心を引き上げた立体図は山の形と成るでしょう。八間の中の父韻の働きが佐渡の島の区

分の働きで渡され、現れたものが言葉です。言霊ハは葉であり、言の葉というように言葉のことです。父韻

ヒが「言葉の表現が宇宙の表面に完成する韻」であることを思い浮かべますと理解出来ましょう。

山の神、名は大山津見の神と初めに山とあるのは、言葉に霊波・音波の起伏があることを示しています。

波の高いところは父韻であり、低いところは母音であるということが言えます。

中国の老子という本に「谷神は死なず」という文句があります。谷とは山の低いところのことで、母音を表し、母音は先天宇宙の音で有り、永遠の實在であり、変わることがありません。

言霊又

野の神名は鹿屋野比売かやのひめの神またの名は野椎のづちの神

鹿屋野の鹿屋とは 神の家である 言葉の意味で神名であります 真名が 口で発声されて 神名 となります その神名 が 空中を飛んで 大山津見である 言葉となり 山が終わって 鹿屋の野に降りてきた という洒落た表現であります。山から野に下って そこで人に聞かれることとなります。耳の鼓膜を叩くので 野椎の神とも云っています。言霊又は貫・抜く・縫う・温もり等の言葉に見られます。

以上お話ししました フモハ又の四音の言霊は 発生された言葉が口腔 離れて 空中を 飛んでいる時の状態を表しています。人の身体とは 離れた外界のことでもありますので、風 木・山・野の神として、自然物の名前が付いているわけです。この発声されて 空中を飛ぶときの言霊を 神名と呼びます。そして耳で聞かれ 復唱され 了解される過程で 再び 真名に帰ることとなります。言葉は 人の口を 離れ

れば、その生命が失われるという別ではありません。空中を飛んでいる時もちゃんとその内容 エネルギーは維持され 人に聞かれて 影響を与えます 。でありますから、人間の 精神生命の 範囲とは 言葉の影響が 及ぶ すべてのところとすることができ 結局 人間生命の存在領域は 宇宙である と言うこととなります。決して 一個の肉体だけに限定されているわけではありません。それでありますから 宇宙の中に起こる現象のすべては 言霊という観点にまで集約しますと、この話の中で述べております 五十音言霊に還元して表現することができ、残すところがないのです。

その 246 につづく

2021 年始めにあたり、言霊について整理しましょう 7

その 246

言霊子音 4

大山津見の神・野椎の神の二神 山野によりて持ち別けて生みたまふ神の名は 言霊八・又

発生された言葉は空中を飛び 大山津見の神で山を越え 野椎の神となって野に下ってきました 。そこで

言葉が自分または他人の耳に入ります。聞かれた言葉はそこで次々に現象を生みます。それを言霊で

表しますと、ラサロレノカマナコの十言霊となります。

言霊ラ・サ

天の狭土神、国の狭土の神

狭土とは耳孔の狭いところの椎（槌）の意味。天は霊を、国は音を分担していることを示しています。

言葉が耳孔の狭いところを入れて行く様を言います。言霊ウは螺旋の字が示すように螺旋運動のことで
す。言霊サは刺す・指す・差すが示すように1定の方向に向かったの浸透状態であります。

言霊ロ・レ

天の狭霧の神・国の狭霧の神

狭霧とは、言葉の霊と言とが霧のようなパイブレーションとなって耳の孔の奥へぐるぐる廻りながら入り込んで行く様であります。

言霊ノ・ネ

天のくらど闇戸の神、国のくらど闇戸の神

細い耳の孔の奥に入り込んだ言葉はその霊と言の波動がくらがり闇がりの戸（くらど闇戸）に突き当たります。

聴覚器官のことです。そこで言葉は改めてふくしやう復誦されます。言霊ノ・ネは宣る・音に通じます。有

音の神名である言葉が脳内で真名に変換されるために、まず音が宣られることとなります。言霊ノは

宣る・乗る・退く等の言葉に、言霊ネは音・値・根・願う等に見られます。

言霊カ・マ

おおとまどひこ大戸惑子の神・おおとまどひめ大戸惑女の神

古事記神代の巻きの文章の 中に 著者 太安万侶 の頭脳の冴えは随所に見られますが、この言霊カ・マを指す指月の指として大戸惑という 神名を 当てたことなどは、その冴えの 1 つでありましょう。まさに絶妙と言えます。言霊力は 搔き・掛く・借りる・貸す等に見られ、言霊マは巻く・混ぜる・丸める等で考えられます。有音の神名が耳で聞かれ復誦され入ってきた言葉がどんな意味を持っているか、と頭の中で搔き混ぜられ煮つめられます。カマ即ち釜は物を煮詰める道具です。そのことによって言葉の内容が 次第にはっきりしてきて 有音の神名が再び真名に変換されていきます。そして大戸惑子の神は言葉の霊を、大戸惑女の神は言葉の言（音）を受け持っています。耳に入ってきた言葉が言霊ノ・ネ（宣音）で復誦され次に言霊、次に言霊カ・マでその内容・意味を「こうかな、ああかな」と 大いに戸惑いしながら了解されてゆく働きに対して、大戸惑という男神の名を当てた事などは誠に洒落ているではありません。

言霊ナ

鳥の石楠船いはくすふねの神・またの名は天の鳥船とりふね

言葉が頭の中で 見つめられ ああこうということなのだ と その内容が 了解されます。了解された 内容が「ナ」であり 名であります。「名は体をあらわす」などと申します。了解された内容が その事物の真相です。言霊ナは 名前・成す・ かん慣れ・萎える等に見られます。鳥の 石楠船の 鳥は十理の意味です。

ア（吾）とワ（汝）との間に双方を結ぶ八つの封印父韻が入って現象子音を生みます。父韻は私と貴方との間を飛び交いますので 昔の人は鳥にたとえました。アとワと父韻で 十数となり 現象を生む理となります。石楠は 五十の葉である五十個の言霊を組んで澄ますの 意味。すると五十音図が出来上がります。

船とは五十音でできた言葉を運ぶもの御船代と呼びます。神社で神様を乗せる船といいます。鳥の石楠船の神全部で「言霊の原理に基づいて五十音言霊図上で 確かめられた物事の内容」と言うことになります。またの名 天の鳥船も同様な意味です。

発言され、人の耳で 聞かれた言葉の内容がここで確定・確認されます。このように発声され人に聞かれ、その内容（ナ）が確認される時、初めて私と貴方の交渉で生み出された現象が、私と貴方と離れた第三者である「子」としてその存在が確立されることとなります。

その「子」が次に生まれます大宜都比売の神すなわち言霊コであります。父と母との間に生まれた子が父母とは違う第三者としての存在となります。甲と乙の間で 1 つの契約が取り決められますと、その契約がかえって甲と乙とを縛る存在となりますのも、その契約が甲と乙と離れた第三者になったからであります。

言霊コ

おおげっひめ
大宜都比売の神

大宜都比売とは大いに宜しき言葉（霊屋子）を秘めて（比売）いる、とういう意味。言霊子音のことであります。物事の実相であり、またその最小の単位のことです。

その 247 につづく

2021 年始めにあたり、言霊について整理しましょう 8

その 247

言霊子音 5

伊耶那岐・美の二神、言霊イ・母の呼び合い（^{よぼ}婚い）によって私と貴方との間に交流が起こり、現象を生みます。その現象の最小の単位となるのが言霊子音です。母音と半母音の交流は、その橋渡しの役割である父韻が母音に働きかける形となり、結局八つの父韻と四つの母音 八と四との相乗積で合計三十二の子音が誕生します。

父と母が呼び合って子が生まれます。前にもお話ししましたように、子音は父と母との結合によって創生され、父と母との双方の性質を受け持っておりますが、それでいて父と母から独立した第三者としての存在です。

主体と客体、心と体 の双方から生まれ、そのいずれとも違った実相（現象の姿）の単位であります。お大宜都比売の神・言霊コは 現象子音であり子であります。その前に誕生しました鳥の石楠船の神 言霊ナは、子の内容といった意味を持っています。

伊耶那岐・美二神の子生みによって誕生してくる三十二の神々 すなわち三十二の子音についてお話してきました。これら三十二の子音言霊については 数理的・概念的・比喩的な説明 ならともかく、そのものズバリの指摘が行われますのは世界の歴史上ここに挙げます古事記ともう一つ日本書紀があるに過ぎません。

誇張でもなんでもなくこの 2000 年の間 日本と世界の人々が物事の現象の最小の単位である言霊子音の説明に接することができますのは 古事記 と日本書紀の「子生み」の 文章以外には見られない重要なことでもありますので、「子生み」の 文章の要点をもう一度おさらいしておきたいと思います。言霊子音の解明は世界中の宗教書・東洋哲学の奥義秘伝なのですから。

その 248 につづく

古事記で「天つ神諸々の命」と言われます 先天十七神 十七言霊の活動が起こり、それが一つの

考えにまとまり（津島）、その考えが言葉に組まれて口で音声として発音され（佐渡の島）その声が空中を飛び、人の耳で聞かれ復誦検討された後、「こういうことだったのだな」と了解され、心と言葉の循環が1段落して、言葉としての真名が再び最初の先天に帰ります。

以上のように一つの発想が言葉となって発音され、それが耳で聞かれ確認・納得されて初めて一つの出来事が決定されます。子である現象の実相が生まれます。人間の心はこのように循環して現象を生みますが、この心の一循環を詳しく正確に観察しますと全部で三十二の工程がありその一つ一つの工程が以上を説明してきました三十二の子音で示されるのです。

人間の頭脳内に起こった一つの発想が事実となって生まれるまでに三十二の子音で示される工程をたどることはお分かりいただけのことと思いますが、その生まれる事実（出来事）を構成する最小単位がまたその三十二の子音である、ということです。これはなんとも奇妙で巧妙なことでありますが、全くの事実です。この奇妙であるが事実としてあること、これも心の最小単位である言霊にして初めて起こりうることであって、前にも申しましたように「言霊の幸倍」（ことたまのさちはへ）と呼んでいます。この言霊の原理の「妙」はしっかりご記憶願いたいと思います。

太倭豊秋津島（おおやまととよあきつしま）またの名は天（あま）つ御虚空（みそら）豊秋津根別（とよあきつねわけ）

以上発生された言葉が空中を飛び、耳で聞かれて確認され現象が確認確定するまでの心の区分、志那都比古（しなつあきひこ）の神より大宜都比売（おおげつひめ）の神まで、フモハヌ・ラサロレノ

ネカマナコ の十四 言霊の位置を 大倭豊秋津島と呼びます。ここまでが五十音の言霊が全部勢揃いしますので 大和（大倭）でありそれがすべて 豊に明らかにあらわれる（豊秋津）区分（島）というわけであります。それはまた先天から（天つ虚御空）豊かに（豊）明らかに（秋）現われた（津）音（根）の区分（別）でもありますので、天つ虚御空豊秋津根別とも呼ばれています。

注一、心の循環は文章で説明すると長くかかることになるが、人の発想から確認まで実際には一瞬間であることが多い。その心の循環を仏教の天台宗では一念と呼ぶ その一念の内容は説明せず、ただ数理で示し 1 念三千と言う。